セカンドオピニオン外来で、相談に乗ることも多い谷口医師。関西など遠方から来院する患者や家族も少なくない

転載・二次使用禁止

医療ジャーナリスト
伊藤隼也が行く！
ニッポンの医療現場 第42回

白血病治療の最新事情
治る／治りにくい白血病が分かる 大切なのは年齢に応じた治療

今年2月、十二代目市川團十郎さんが白血病に倒れたが、ほかにも渡辺謙さんや本田美奈子さん、大塚範一さんなど、この病気を患った著名人は少なくない。今回はこの白血病について、團十郎さんの主治医で白血病治療の専門家、谷口修一医師（虎の門病院血液内科部長）に取材した。

「不治の病」から「治る病気」へ

白血病とは血液がんの一種で、血液を作る造血細胞ががん化する病気だ。貧血や青アザなどをきっかけに病院の血液検査で見つかることが多い。

テレビドラマ「赤いシリーズ」の薄幸のヒロインから、「世界の中心で、愛をさけぶ」の元恋人まで、白血病は実に多くの物語で扱われている。それゆえ「不治の病」というイメージを持つ人も多いのではないか。

「確かに私が研修医だった二十数年前は、長期に生きられる人は1割ぐらいで『努力はしますが……』という悲惨な状況でした。しかし今は、白血病の解明が進み、抗がん剤による化学療法や造血幹細胞移植なども進歩したため、多くの人が元気になられています」

力強くこう話すのは、白血病治療の専門家、谷口修一医師だ。谷口医師が率いる虎の門病院血液内科では、年間150例の骨髄移植を実施。日本トップクラスの白血病治療の実績を持つ。

いとう・しゅんや●医療ジャーナリスト・写真家　国内外問わずさまざまな医療現場を精力的に取材し、患者中心の医療実現のため活動中。テレビ・雑誌・書籍など、多数のメディアでより良い医療のあり方を追求・発信し続けている。http://shunya-ito.tv　Twitter＝@itoshunya

白血病というと一つの病気のように思えるが、実際は急性骨髄性白血病、急性リンパ性白血病、慢性骨髄性白血病などいくつかに分類、さらにそこから細分化される。個人差が大きい病気だ。タイプは血液検査でほぼ分かる。

「今は白血病の性質から、治りやすさや、どの治療が必要かなどの見当がつくようになりました。年齢や患者さんの希望などによっても変わりますが、この性質によって治療方針を変えるのが基本です」（谷口医師）

最初に化学療法が行われる。近年、正常細胞を傷つけずにがん細胞だけを攻撃する新しいタイプの抗がん剤（分子標的薬）も登場し、苦しいだけの抗がん治療からかなり進歩している。

化学療法で効きにくい性質の白血病や再発した場合に行うのが、ドナー（骨髄提供者）から採取した造血幹細胞を体内に戻す幹細胞移植だ。より強力な移植前治療のあとに移植された新しい造血幹細胞から作られた免疫細胞が、体内に残っていたがん細胞を免疫的に叩くことで、根絶を狙う。

「有効な治療ですが、免疫反応が強すぎると、肝臓など正常な臓器まで攻撃を始めるGVHD（移植片対宿主病）という移植に伴う合併症が起こる。そのため、免疫抑制剤を用いながら調整を図っていきますが、その兼ね合いが難しく、専門家の力量が試されるところです」（谷口医師）

この移植は日本では1970年代に始まった。91年には骨髄バンクが誕生。最近は「ミニ移植（最初に行う抗がん剤の量を減らして行う移植）」や「臍帯血（赤ちゃんのへその緒、臍帯血に含まれる造血幹細胞を用いる）」、移植後に抗がん剤を用いる方法なども始まっている。

マイナス200度近くの液体窒素で凍結してある移植用の臍帯血。移植のために取り寄せた

今を生きるために必要な治療とは？

このように白血病治療は大きく前進した。しかしながら、まだ一部の白血病は、最新の医学を駆使しても克服できない難治がんである。このような白血病と患者はどのように向きあっていけばよいのだろうか。谷口医師は言う。

「白血病では医師も患者さんも、生存率や副作用の割合などの数字のマジックに踊らされやすい。しかし大切なのは、患者さんの年齢やライフスタイル、人生観と、現在の病状や治療法などを考慮して方針を決めることです」

例えば、移植は前治療である多量の抗がん剤投与も含め、患者への負担が大きい。これから未来がある若い患者では、多少、その負担をがまんしてでも治すための治療をすることが重要だ。一方で、60代、70代以降の高齢者で、症状がほとんどない場合、あえてそういう厳しい治療を受ける必要があるのか、と谷口医師は疑問を呈する。

「高齢者の場合、長期的な入院をすれば、その影響で歩けなくなるケースもある。それでいいのか、ということです」

ある70代半ばの男性患者は、週に1回のゴルフや釣りを楽しむほど元気があった。2年前の初診時にその様子をみた谷口医師は、患者と家族と話し、病状が進行するまで化学療法をせず、定期的な診察だけで進めることにした。今もその状態のまま、男性は趣味を楽しんでいるという。

「こういうと、『生きるのをあきらめる治療』というふうに思われるかもしれませんが、まったく違います。症状が出てきたら、そのときは最善の治療をする。今の移植の現状や治療成績、患者さんへの負担の大きさを考えると、それからでも決して遅くないと思っています」（谷口医師）

最初の治療から4年半。平均寿命を考えたらまだまだ若いといえる、66歳でこの世を去った團十郎さん。歌舞伎界を背負う立場として、舞台に立つための激しい稽古を続けざるを得なかった。

ご本人の精神力の強さがあってもなお、治療が困難を極めたであろうことは、想像に難くない。谷口医師の言葉を借りれば、「どのような人生を送りたいかは、本人の意志が最も尊重されるべきもの」ということだろう。

最新の治療が、ときに最善の治療とならないこともある。これも高齢化社会におけるもう一つの医療の姿といえよう。我々患者が受ける医療にもTPOがあることを覚えておきたい。

取り出した臍帯血。量はわずかだが、この母体と胎児を結ぶ臍帯血には幹細胞が多く含まれている

写真／SHUNYA ITO© 取材協力／山西リカ 協力／虎の門病院 血液内科